



〈運動の原点は沖縄戦〉

私の父、母、おじい、おばあは、皆、戦中世代です。物心ついたところから、戦争の悲惨さ、沖縄戦の悲劇を聞いて育ちました。その話を聞くなかで、「戦争だけはダメだ!」という思いを強く抱くようになりました。

中学生、高校生になるにつれて、自分で戦争のこと、沖縄戦のことを学びたいと思い、当時の米軍の資料や仲里正子さん（元ひめゆり学徒）の著作を読んだり、映画を観たりしました。このときに学んだことが、今の運動の原点です。

〈運動と理論が結び付く〉

1968年に佐藤・ニクソン会談があり、1972年、沖縄が本土復帰しました。でも、それは沖縄県民が望む「基地のない沖縄」とは程遠いものでした。核兵器、基地はもとより、米軍による殺人、傷害など、さまざまな問題がありました。それに対して、高校生だった私は、学園民主化の訴えとともに、抗議のためにストライキを行いました。そうしたら、最も重い除籍処分になり、退学です。その後、アルバイトをしながら、大学検定試験を受け、大学に進学しました。大学では、歴史、哲学、社会学など、多くのことを学び、血肉化してきました。大学時代に学んだ理論が、それまでの運動と結び付くとともに、現在の支えにもなっています。

大学を卒業した後、沖縄県庁の職員になりました。折角、公務員になったのだから、おとなしく働こうという気持ちが少しはあったのです（笑）。でも、その気持ちはすぐに薄まりました。当時の県政は、体制派が主流であり、「沖縄県民

希望をもって生き抜こう

沖縄平和運動センター議長 **山城博治** さん

のため」の県政ではなかった。特にひどかったのは、1987年に開催された国体（国民体育大会）でした。当時の知事は、この国体に天皇を呼ぶことで、戦後を終わらせようとしていました。学校に日の丸を掲揚させたり、それを子どもたちに振らせたりするなど、スポーツ大会ではなく、完全に「政治大会」でした。私は、周囲に「獅子身中の虫」と言われながらも、反対運動を続けました。苦しかったけど、「俺は、俺の生き方をしよう」と思って活動を続けていました。

〈一人じゃない〉

私たちの運動は、米軍基地反対だけをめざすものではありません。障害のある人、放射能被害に遭った人など、理不尽な政治から排除されている人々が、心を結び、希望をもって生き抜くことをめざしています。私が不当な拘留をされたときも、多くの人々が支えてくれました。「一人じゃない」ことを感じました。これからも、多くの人と手を取り合い、平和を求める運動を続けていきたいと思っています。

やましる ひろじ / 1952年沖縄生まれ。法政大学卒業後、沖縄県庁に入庁。2013年より現職。辺野古新基地建設、東村高江のヘリパッド建設反対運動などにとりくみ、多くの平和・市民団体と連携、県内外に幅広いネットワークをもつ。沖縄の平和運動の象徴的存在。